附属校・公立学校との連携事業活動概要報告書

学び方から広がる複式教育

【共同研究者】川村　繁博（和歌山大学附属小学校）
中西　大（和歌山大学附属小学校）宮脇　隼　（和歌山大学附属小学校）
西口　裕子（和歌山市立鳴滝小学校）近藤　聖奈（和歌山市立鳴滝小学校）
木下　雄生（和歌山市立雑賀崎小学校）北野　美和（和歌山市立雑賀崎小学校）
佐藤　菜津　（和歌山市立加太小学校）
【研究代表者】森下まちこ（和歌山大学教職大学院）

１．はじめに

本研究は、和歌山大学教育学部の地域連携事業として、和歌山市内はもちろん県内・泉南地域の学校の教員が連携し、実践的な研究を行うことを目的としている。

県下では少子化が進み、令和元年度、複式学級を設置している小学校が 63 校（124 学級）、中学校が 5 校（5 学級）存在する。過去 5 年間の推移をみると、小学校においては学校数が、年々増えてきている。

このような状況で、少人数ではあっても個々あるいは集団としての学びを広げ深める複式教育の具体的な実践方法について探っていくことが大きな課題であると考えた。

そこで、担任 1 人が複学年の児童たちにどう関わると、児童同士あるいは児童 1 人でも学びを広げ深めることができるのかに焦点を当て取り組むことにした。

２．　活動の概要

附属小学校において複式学級を複数年担任経験のある３名の教諭を中心に、現在複式学級を担任している教諭や近い将来、複式学級開設が予定されている学校の教諭ら合わせて 8 名で取り組むことにした。

7 月　研究部員各校の現状と抱える課題・悩みについて出し合う。
12 月　紀美野町立小川小学校において授業参観と複式授業について協議する。
2 月　本年度の研究及び来年度に向けて話し合う。（予定）

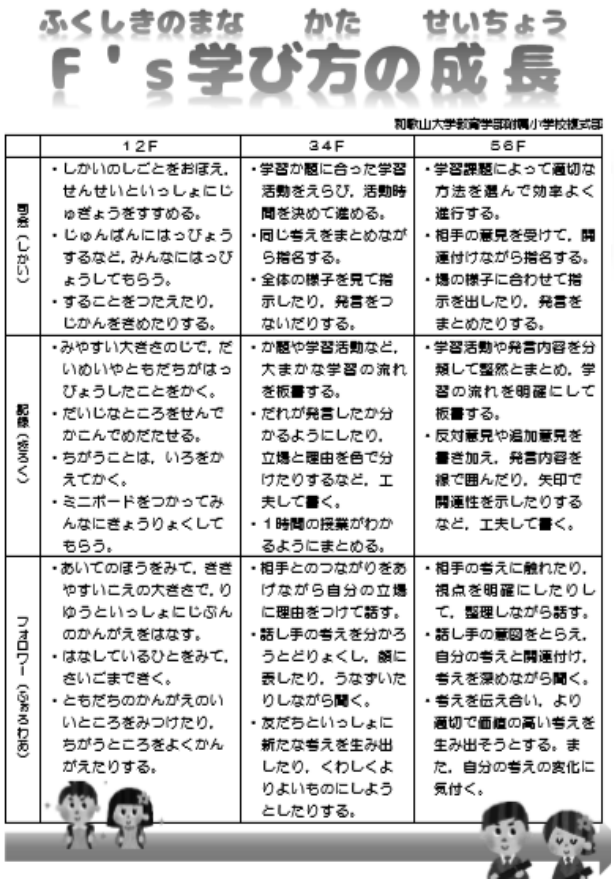
6 月　第 19 回和歌山大学附属小学校複式授業研究会
8 月　橋本市立恋野小学校　講師派遣依頼を受け、講義及び助言を行う。
10 月　福井県教育委員会来訪(視察)
11 月　香美町立余部小学校　講師派遣依頼を受け、講義及び助言を行う。
12 月　第 22 回冬季全国算数授業研究大会和歌山大会に参加。複式授業を参観する。

３．　本年度の取組

研究テーマは,『学び方から広がる複式教育～司会･記録･フォロワーで創る探究的な学び～』である。司会者・記録者・フォロワーがそれぞれの役割を果たして学びを進める中で，既知既有の経験を通して自ら学び，考える主体的な態度を育成することをねらいとした。子どもたちが問題解決に向けて協働して学び合い，解決方法を探り出していくことで学習者としてだけでなく学習集団としての探究力や省察性の育成が図られると考えている。

「司会・記録・フォロワーの育成」

司会や記録は複式学級の子どもたち特有の学習活動である。勿論，単式学級においてもこれらの役割が必要とされる場面や学習活動はあるが教科学習を進めていく中で複式学級ではその役割は非常に大きい。その役割を十分に機能させていくためには，系統だった指導とスキルモデルが必要である。本年度は，それぞれの役割について低・中・高学年と段階を追ったモデルを子どもたちにも示して複式部全体で共有し司会・記録・フォロワーの育成を図った。



	12F	34F	56F
司会（ことば）	・しかいのしごとをおぼえ，せんせいといっしょにじゅぎょうをすすめる。 ・じゅんばんにはっぴょうするなど，みんなにはっぴょうしてもらう。 ・することをつたえたり，じかんをきめたりする。	・学習が題に合った学習活動をえらび，活動時間を決めて進める。 ・同じ考えをまとめながら指名する。 ・全体の様子を見て指示したり，発言をつないだりする。	・学習課題によって適切な方法を選んで効率よく進行する。 ・相手の意見を受けて，関連付けながら指名する。 ・場の様子に合わせて指示を出したり，発言をまとめたりする。
記録（ノート）	・みやすい大きさのじで，だいめいやともだちがはっぴょうしたことをかく。 ・だいじなところをせんでかこんでめだたせる。 ・ちがうことは，いろをかえてかく。 ・ミニボードをつかってみんなにきょうりょくしてもらう。	・か題や学習活動など，大まかな学習の流れを板書する。 ・だれが発言したか分かるようにしたり，立場と理由を色で分けたりするなど，工夫して書く。 ・１時間の授業がわかるようにまとめる。	・学習活動や発言内容を分類して整然とまとめ，学習の流れを明確にして板書する。 ・反対意見や追加意見を書き加え，発言内容を線で囲んだり，矢印で関連性を示したりするなど，工夫して書く。
フォロワー（ひきもち）	・あいてのほうをみて，ききやすいこえの大きさで，りゆうといっしょにじぶんのかんがえをはなす。 ・はなしているひとをみて，さいごまできく。 ・ともだちのかんがえのいいところをみつけたり，ちがうところをよくかんがえたりする。	・相手とのつながりをあげながら自分の立場に理由をつけて話す。 ・話し手の考えを分かろうとどりょくし，顔に表したり，うなずいたりしながら聞く。 ・友だちといっしょに新たな考えを生み出したり，くわしくよりよいものにしようとしたりする。	・相手の考えに触れたり，視点を明確にしたりして，整理しながら話す。 ・話し手の意図をとらえ，自分の考えと関連付け，考えを深めながら聞く。 ・考えを伝え合い，より適切で価値の高い考えを生み出そうとする。また，自分の考えの変化に気付く。

「学習環境」

複式学級では，子どもたちが司会や記録を行わなければならない。構造化された板書は教師にとっても難しいものである。記録の役割は，子どもたちにとっては大変難しいことである。「どこに」「何を」「どのように書けばいいのか。」子どもたちにとっては戸惑うことも多い。実際，子どもたちに板書をすべて任してしまうと学習の流れや思考が散乱したものになってしまう。そこで，子どもたちの思考を整理していくために，似た考えや賛成の意見を赤色で書くこと，違った考えや反対の意見を青色で書くことなどを意識づけたり，黒板をテープで分割し板書の場所に制限を加えたりして構造化を図った。

「価値づけ」

子どもたちは経験を積むうちに，授業の進め方にも慣れ活発に話し合うことができるようになる。一見，授業が滞りなく進んでいるかのように感じる。しかし「本時のねらい」と照らしてその内容を吟味していくと，本時の目標や付けたい力とは離れたところで話し合いが進んでいることも少なくない。それを適切に見極め，深めたり修正したりすることが必要となる。そこで，直接指導時や授業の終末に本時の目標に繋がる発言や板書を取り上げ価値づける指導過程にも重点を置いた。

４.本年度の取組

〈5.6 年生国語科実践〉

-複式指導における単元構成-

複式指導における単元構成には、いくつかの種類がある。それは、同単元同内容・同単元異内容と呼ばれている。

同単元同内容とは、上下学年の内容をＡ年度、Ｂ年度の両年度に分配し、学年差を考えつつ、学級で共通課題を追求していこうとする単元構成である。単元内でのまとまりが生まれ、学級として共通の課題を追求できるので子どもたちにも異学年の共同が生まれる。しかし、単元相互の関わりが薄くなることや順序性を感じにくくなってしまう一面がある。

同単元異内容とは、同じ単元を構成し授業を展開しながらも、それぞれの学年で扱う教材が異なる単元構成である。国語科では教科書自体も複式指導の事が配慮され、同単元が組みやすいようになっているので指導計画を立てやすい。読むこと・書くこと・話すこと聞くことなどが同じような時期に行えるようになっている。しかし、異学年の交流は生まれにくく、それぞれの学年が独立した単元を展開していく。

本実践，子どもたちに自然な形で異学年交流の生み出すために「同単元異内容同視点（同課題)」での単元構成を「異学年力」を高める手立てとして国語科の単元で設定した。

-カリキュラムマネジメント-

探究力を育むカリキュラムマネジメント考える上で、カリキュラムデザインには幾つかの方法が考えられる。教科横断的に行うもの、教科内で行うものである。複式学級においては、異学年間のカリキュラムをデザインし揃えることもできる。本研究では、異学年としても学びの深まりを考えることを第一の目的としたため、それぞれの学年で教科横断的に進めていくカリキュラムマネジメントではなく、教科内での物語文教材の配列をデザインし、異学年間で「同単元異内容同視点（同課題)」になるよう物語文教材をどう配列するのかに重きをおいた。

単元名	額縁構造をとらえて読もう
内容	５年「わらぐつの中の神様」 ６年「やまなし」
視点	額縁構造をとらえ、それぞれの場面に登場する人物から主人公にせまり、作品の主題や額縁構造の効果について考える。

「同単元異内容同視点（同課題）」

授業の実際【実践１より】

異学年交流を生み出す学習課題の工夫

本時の学習課題の「この作品の主人公は誰だろう？」を提示するにあたり大切にしたことは，これまで作品の中の登場人物に寄りそった読みをしてきた子どもたちに，主人公を問うことで作品の外側から作品を見つめ直し，構造に目を向けさせようとしたことだった。

また，いくつかの選択肢の中から自分の考えをもたせることも大切にした。本学級の子どもたちは学力の差が大きく，発言力のある子どもだけで授業が展開されることが多い。そのような学習環境に萎縮して，自分の考えを言えない子にとって選択肢を与えることで安心して学習に向かうことができると考えていた。

さらに，本単元で扱う額縁構造の作品だけで考えるのではなく，これまでに学習した既習教材であるファンタジー作品の構造を例に出し，比較させることもより自分の考えをもつことにつながると考えていた。

−本時における異学年の交流場面−

【作品における主人公が誰であるのかを話し合う場面】

５年生は「わらぐつの中の神様」で，初めは『おみつさん』を主人公だと話し合っていた。しかし，これまでの学習してきた文学作品では，気持ちに大きな変化がある登場人物が，主人公であることに目を向けさせることで，『マサエ』がこの物語の主人公ではないかと考えだしていた。６年生は「やまなし」で，『私』と読んでいた子もいたが，『かに』が主人公であると結論づけていた。額縁構造の作品は額縁の外側に主人公がいることに気づかせたいと考えていたので，授業の終末には５年生と６年生と本時の学習したことについて意見を交流させた。そこでは，５年生と６年生の読みにズレがあり，これまでの学習してきたことを活用して話す子どもの姿を見ることができた。

５年Ｃ：（「お手紙」の主人公が）がまくんやったら，最後かえるくんが手紙くれて喜んでたから，マサエも（わらぐつが）みったぐないって思ってたけど，最後いいなって思ったから，がまくんも変化したし，マサエも変化したからマサエが主人公。 ６年Ｃ２：（主人公は）おみつさんで，【６年Ｃ４】	５年Ｃ：「スイミー」は最初仲間を食べられて悲しかったけど，最後まぐろを追いかけて元気になったから，心情曲線で表したら，仲間を探してるうちに気持ちが上がって，最後仲間見つけたから気持ちが上がって，気もちが変化したから（スイミーが）主人公だと思う。

が言った昔の部分にマサエがいないから。 ５年Ｃ：今の話でマサエが（わらぐつを）嫌って言って，それがきっかけで，昔の話になったからマサエ（が主人公だと思う。） ６年Ｃ４：きっかけを作る人が主人公なんですか？それなら，「スイミー」だったらマグロが主人公やん。	

５．成果と課題

・県内外（橋本市立恋野小学校、香美町立余部小学校）から講師派遣依頼を受け講義及び助言を行うことによって複式教育の在り方について研究を深めることができた。
また、附属小学校や公立小学校の実践を交流することによって各校に複式の教育法を還元することができた。福井県南越前町教育委員会からの視察依頼を受け入れ実践を広めることができた。

〈図１ ICT 機器の活用〉

〈図２ ICT 機器の活用〉

〈図３ 南越前町視察 参観〉

〈図４ 南越前町視察　複式概要説明〉

・公立小学校を視察することにより、極少人数での実践について研修を深めることができた。

〈図 3 極少人数での学び　余部小〉〈図 4 極少人数での学び　小川小〉

−共同研究者からの声−

・授業の組み立て方（直接指導・間接指導　わたり）について、大いに参考になることがあった。
・授業を参観し、授業の導入や課題提示の仕方等の工夫を知ることができて良かった。
・教室の掲示等の学習環境を参考にして取り入れていこうと思った。
・他校での実践や課題を聞くことができ参考となった。
・ICT 機器の活用などの実践を知ることができ大変有意義であった。
・複式の子どもたちの６年間の成長を見通して、身に付けさせたい力やカリキュラムを編成していくことが大切だと感じた。
・子どもを育てることの大事さ附属小学校を参観して、「子どもたちは学び方を知っている」、「子どもが育っている」ことが見てとれ、素晴らしいと思った。
・本事業に参加している学校全てが参加できる日程が取れず研究を深めることができなかった。実際に相互参観する中で研究テーマにつながる学びがあったと思うが、叶わなかったのが残念。
・本事業の参加校が 4 校にとどまったのが残念。市外の学校にも広く広報し、多くの参加を呼びかけ研究を進めていければと考える。また、取り組みの成果についても広く発信していくことが必要だと考える。